

青森大学附属総合研究所

総研だより

第5巻 第4号 2024年3月31日

◇ 目次

1. 【平内町 × 青森大学 包括的連携協定】地域素材を活用した「平内町ツバキ油しぼり」理科教材の開発および平内町小学生を対象とした実践と展望
薬学部・SDGs 研究センター 大越絵実加 …………… 1
2. SDGs 研究センター報告
SDGs 研究センター長 藤 公晴 ……………5
3. 2022・2023 年度 比較環境思想研究会 報告
比較環境思想研究センター長 関 智子 ……………9
4. 『寺山修司 ぼくの青森ノオト』刊行
附属総合研究所・客員研究員 久慈 きみ代 ……………13
5. 学生は「仏陀の戦争」の結末をどう考えたか
社会学部 飛内 文代 ……………15
6. 映画「プリズン・サークル」自主上映会
社会学部・青森大学 BBS サークル顧問 熊谷 芳子 ……………17
7. ニュースレター「はっしん！新青森」創刊 50 号、連携・交流拡大の起点に
社会連携センター・副センター長 櫛引 素夫 ……………22
8. 中村公英氏を講師に特別講演会「昭和青森を生き抜いた男たちー淡谷悠蔵と竹内俊吉の時代」
……………25
- ▼ 総研日誌 …………… 26
- ▼ 編集後記 …………… 26

1.【平内町×青森大学 包括的連携協定】地域素材を活用した「平内町ツバキ油しぼり」理科教材の開発および平内町小学生を対象とした実践と展望

薬学部・SDGs 研究センター 大越 絵実加

1. はじめに

現在の時代や社会状況は、SDGs（持続可能な開発目標）が世界的な規模で展開されています。SDGsでは、生物多様性や地球温暖化といった環境問題だけでなく、教育、ジェンダー、まちづくりといった経済・社会系の課題も含んでいます[1]。そして、日本の文部科学省は「ESD（持続可能な開発のための教育）」として、これらの課題に対して行動できる人材を育成する教育の推進を図るよう促しています[2]。

その中で「理科教育」に代表される科学的な「見方・考え方」は、直接的あるいは間接的に、多くの課題解決に寄与すると考えられ、未来を担う生徒の行動変容を促せる学習として注目されているのです。

理系採用のニーズが高まる一方で、国内の理系学生の数は減少しており、理系人材の不足は科学技術立国の日本において深刻な問題です。同様に、若年人口の流出や人材不足は、地方の持続成長の顕在的課題となっています。私たちは、理系人口の減少は、基本的に「理科の難しさが強調され、面白さが生徒に伝わっていない」ことが根底にあると考えました。身近なところから行動を開始し、学びを実生活や社会の変容へとつなげる視点を地域に醸成する目的で、地域を題材にした体験型理科教材の開発を行いました[3][4]。

今回は、これら SDGs 活動について（1）実践と（2）展望、について取組を紹介します。

2. 取組

（1）実践

本学と包括的連携協定のある平内町を SDGs 活動のモデル自治体として選定し、平内町にある国の天然記念物「ツバキ自生北限地帯」を青森県の1つの特色ととらえて教材化することを考えました。小・中・高・大学の地

域一貫教育による理系人材の輩出に取り組むことで、理系/地域人材の不足という課題に対して未来に向けた解決の足がかりを見出すことを想定しています。

今回の理科教材は、小学生を対象としました。小学校理科の内容を参考にし、いろいろな教科とのつながりを意識しました。ツバキ種子を割る「てこの利用」と「植物の成長と季節」、ツバキ油の活用方法、職業的キャリア教育として、販売するときには「薬剤師免許」が必要なことを含めました。そして、ツバキを地域ブランドとするために、天然記念物の保護を配布資料に含めています（図1）。

開発した理科教材は、平内町に住む住民の協力を得

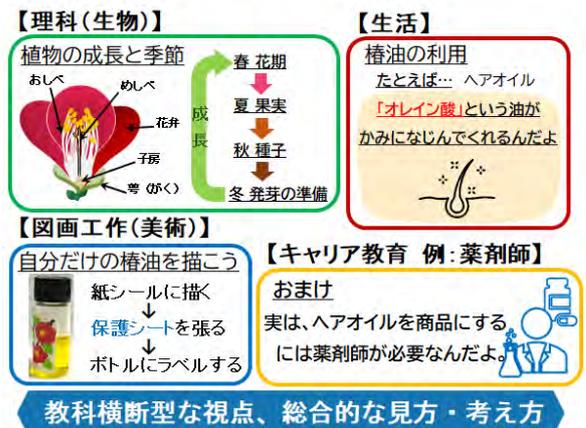


図1. 理科教材の配布資料（一部抜粋）

て、2023年1月、賛同する1-6年生の小学生3名に対して試験的に実施しました[4]。理科教材を体験した小学生の意見を取り入れ、開発した学生と改良を加えました。そして平内町の地域資源「ツバキ」を題材にしたこの体験型理科教材について、町内の小学校へのカリキュラム導入を視野に入れ、平内町および平内町地域おこし協力隊と協議を重ねました。導入前のトライアルとして、町内に住む小学生を対象に、参加者を公募し、2024年2月に保護者の同意を得られた3-6年生の小学生7名を対象に試行しました(図2)。



図2. 地域素材を活用した理科教材の公募

体験学習では、初めて顔を合わせた小学生同士もいたためか、顔なじみのない大学関係者がインストラクター役だったためか、参加生徒たちは終始無言で、ひたすら作業に集中していました。アンケートの回答には楽しかった感想や学習内容についての興味が多く、開発側の私たちとしてはひと安心しました(図3)。

小学生のトライアルの後は、引き続き、大人を対象に、教材のインストラクター養成講習を実施しました。これは将来、平内町の特徴ある地域素材「ツバキ」を題材にした学習教材の本格導入と、地域を支える「指導者」を増やすためです。地域住民が、子供たちの成長と教育に興味を持ち、ともに生涯教育を通して平内町の魅力を伝え、青森から全国、そして世界へ発信していく、住民主導型のまちづくりを見込んでいます。地域を知る人々が住み慣れた土地を支え、一人ひとりがこの場に集う。人材の流出ではなく、この地域の魅力にひとが還ってくる。心をつなぐ生涯教育を通し「ひと」の循環型社会を目指します。

(2) 展望

2024年8月に平内町の小学校1校で、この地域教材を用いた小規模なカリキュラム(理科)の導入が予定されています。この教材を支える「素材」のツバキ種子は、毎年9月に平内町夜越山森林公園で高校生と大学生が採集したツバキ果実から得ています[3][4]。このツバキ種子について、科学的根拠に基づく高付加価値の製品開発を図るため、東北大学の石井慶造教授らの協力を得て、微量元素を同時に測定できる青森県量子科学センター(QSC)の粒子線励起X線分析(PIXE)技術などを応用し素材を調査しています[5]。青森県ならではの素材の付加価値として、雪室におけるツバキ種子の保存は、同学総合経営学部の佐々木豊志教授らのグループと協力して条件検討を行っています(図4)。

平内町は、所有する国の天然記念物「ツバキ自生北限地帯」の野生種保全を行うため、種子からのツバキの育成を文化庁に申請し、許可されました。平内町夜越山森林公園では発芽に成功し、このツバキ苗について、



図3. 開発した理科教材(平内町ツバキ)の実践

私たちは平内町の技術職員とともに生育調査を続けてい



図4. 雪室保存条件の検討



図5. 天然記念物ツバキの生育調査

ます（図5）。こうして平内町は、国の天然記念物「ツバキ自生北限地帯」の遺伝資源であるこのツバキ苗を育て、魅力あるまちづくりに活用する未来を創造しているのです。

そして2024年9月のツバキ果実採集から、高校生と大学生だけでなく、平内町の町民の参加を公募（6月以降）し、ツバキ素材を収集します。この公募は、平内町および地域おこし協力隊と協働します。ゆっくりではありますが、持続可能で、かつ、確実にできることから歩んでいます。素材であるツバキ種子の収集規模と、教材導入の規模・予算を調整しながら順次、導入を希望する小・中学校、高校へと開発した理科教材の提供を行っていきます。

この取組は、「青森県 R5 年度大学による SDGs の考え方等を取り入れた環境人財育成事業」「青森大学教育研究プロジェクト」「JSPS 科研費 20K03127」の助成を受けて実施いたしました。

3. おわりに

私たちが取り組んでいる地域社会との連携を基盤とする ESD 教育研究では、地域課題を共有する地方自治体、産業界を巻き込んで、将来像の議論や連携、交流の企画を行う恒常的な体制を構築します。

地域資源の活用は、地域の社会的事象に対する理解を深めるだけでなく、地域の特色ある素材や課題をもとに学習することで主体的に考える意欲を引き出します。可視化データや数値、現象を扱うことで地域を見る視点や、よりよい地域の在り方について考えることができ、科学的根拠に基づいた「見方・考え方」を働かせ、思考力を鍛えることにつながると考えています。それは、教材を考案する学生側、教材を使う児童・生徒側の双方で培われることになり、相乗的な学びの質向上につながります。そして、青森大学の「地域とともに生きる」という建学の理念に沿っています。

本学 SDGs 研究センターは、地域に寄り添い、魅力ある学びの場を提供することで、課題に向き合い、地域

の価値を探究できる人材の育成を進めてまいります。

本取組に対してご協力いただきました平内町、平内町地域おこし協力隊の辻井 輝子さま、新潟大学歯学部歯学科の荒木あいらさま、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

[参考文献]

1. UNESCO「持続可能な開発目標のための教育・学習目標」(日本語版)
2. 文部科学省「持続可能な開発のための教育(ESD)推進の手引」(令和3年5月改訂版)
3. 大越 絵実加「SDGs 研究センター 薬学部の活動

報告」総研だより第4巻3号 pp.3-6 (2022)

4. 大越 絵実加「産学官連携 平内町 × 青森大学 SDGs 薬学部の活動」総研だより第5巻3号 pp.7-11 (2023)
5. 大越 絵実加「事例紹介 地域素材を利用したもののづくりと理科教材の開発」2024年01月QSC活用促進セミナー：青森県量子科学センター(青森県観光物産館アスパム)
https://www.aomori-qsc.jp/report/index.php?sc=240229_001051&ct=0002&pn=0
(動画配信)

2. SDGs 研究センター報告

SDGs 研究センター長 藤 公晴

1. 人づくりの仕組みの構築に向けて：

5 年間の歩みの振り返りと整理

これまで多くの教職員と地域の関係者、スポンサーのおかげで、青森大学附属総合研究所 SDGs 研究センターは「地域の自然の再評価」と「教育の質向上」「地域貢献」の3側面を有する教育プロジェクトを展開しながら2023年度の活動を終えようとしている。

とりわけ、青森県環境政策課委託「大学による SDGs の考え方等を取り入れた環境人財育成事業」で2021年度から3年間（合計約1,440万円）、青森学術文化振興財団のチャレンジ枠で5年間（合計約500万円）の規模で、研究という枠を超えた、小学生や一般市民を含む多岐にわたる受益者と連携パートナーによる創造的（言い換えると総花的）な人づくりに取り組み、この総研だよりで報告する機会に恵まれた。また、文部科

学省と環境省が関係省庁と取り組む「持続可能な開発のための教育」（ESD）の推進にかかる地域 ESD 活動推進拠点として青森大学を昨6月に登録した。こうした歩みを支えてくださったすべての関係者と関係機関の皆さまに感謝の意を表したい。本稿では、これまでの取り組みや試み、反省点も交えながら、SDGs時代の地域の学び舎としての考え方、位置づけ、今後の課題について整理したい。

繰り返しになるが、SDGs 研究センターの設立当初からの主張は「地域の自然の再評価」である。大量生産・大量消費の潮流の中、取るに足らないと捉えがち、ないしは見過ごし傾向にある身の回りの自然環境の価値を見つめ直し、目線を変えて学びあう機会を創出することが、人と自然、人と人、社会の新たなご縁づくりにつながる。青森のような地域における観光や製造、第1次産業の振興を通じた雇用創出や活性化もこの射程に含まれ、これらに若者の関心喚起と学習機会を連結し、それらを大学の学びの仕組みに組み入れるべく学びの機会を提供してきた。

とりわけ、子どもや若者の体験不足については、COVID19以前から学習指導要領でも問題視されてきており、高等教育機関における体験の意味づけと位置づけは質向上の観点でも組織的に取り組む分野であろう。

こうした取り組みを進めていく上での基本的な考え方

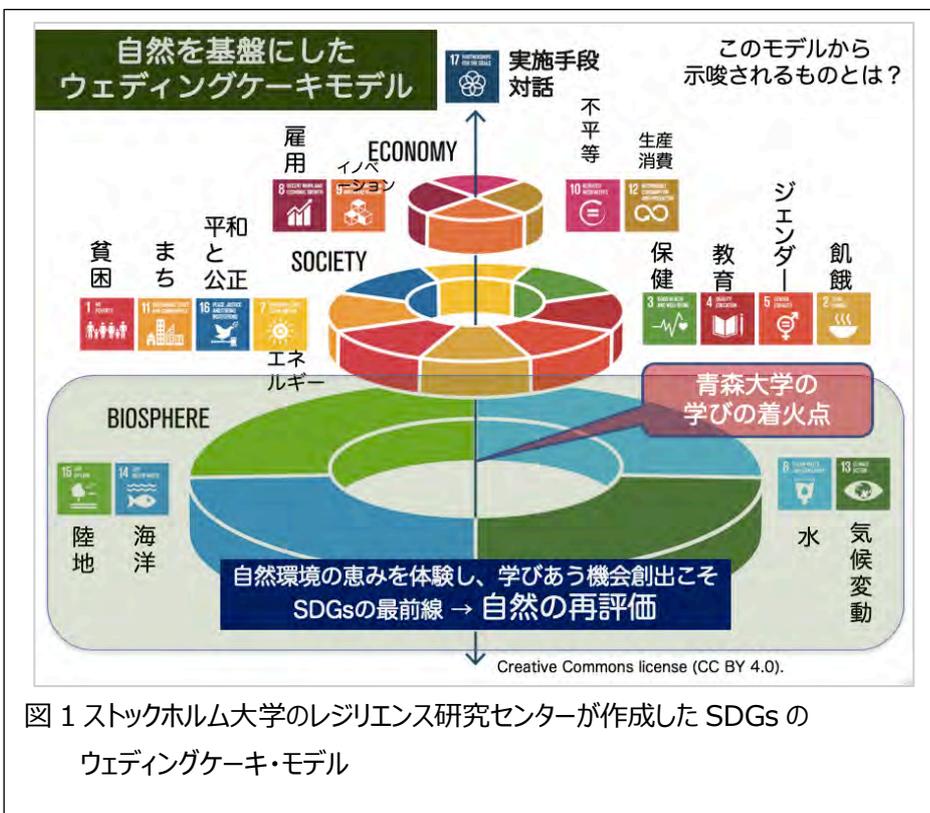


図1 スtockホルム大学のレジリエンス研究センターが作成した SDGs のウェディングケーキ・モデル

が、ストックホルム大学のレジリエンス研究センターが作成した SDGs のウェディングケーキ・モデルである（図 1）。同モデルでは SDGs の 17 目標を「経済」「社会」「生物圏」の 3 階層に整理しており、経済の諸側面とは社会の諸側面が充足されることで成り立ち、経済と社会の諸側面は生物圏（生物多様性）の保全の重要性を示している。また、SDGs で示される複眼的、十全的な取り組みには、多様な利害関係者との協働・協力、パートナーシップが不可欠であることも示している。SDGs 研究センターは、地域の自然環境の恵みを体験し学び合う機会こそ（表中薄赤の吹き出し文字の箇所）、非認知能力の向上や文理融合の仕掛けに加えて、地域の社会的経済的課題の改善解決にもつながる「学びの着火点」と位置づけてきた。

そしてこの 5 年間の様々な試みを通して、学生の体験学習などの機会に加えて、地域のステークホルダーの支援協力を得ながら、より多くの老若男女を巻き込んだ学びの機会提供に取り組んだ。そして、単発の学びや体験の機会提供のみならず、理論化や連携、指導補助としての学生参画、教材開発などが地域の自然の再評価に向けた素材の発掘・意味づけと継承の仕組みづくりにつな

り、こうした仕掛けづくりこそ青森大学のような地域の小規模大学に求められていると考えるに至った。現在、大学における SDGs の取り組みは、産官学協働の研究や商品・先端的な技術や素材の開発が注目を集めるが、SDGs という領域横断かつ世代縦断型の考え方のもと、長期的な視点で社会システムや暮らし、それらを支える価値体系の抜本的見直しが求められる状況を勘案すると、次世代の人づくりに幅広く資する学びの体系の構築は地域の高等教育機関だからこそ満たすことのできる社会貢献なのではと考える。こうした考えや働きかけは、本学の教員免許取得や日本語教員養成プログラムなどの中に、明示的暗示的に埋め込まれているのではなからうか。

図 2 では、①学生への体験および学習の機会提供（正課と正課外教育）という大学の基本的な教育サービスに加えて、②の住民・市民を対象とした生涯学習系や③の商品化など他課題との連結、⑧の学会発表など、多くの教員が日々の教育研究、地域貢献活動で意識的無意識的に実践しているものも含まれるが、⑥の教材・プログラム開発や⑨の地域の指導者育成の機会提供については能動的かつ戦略的に組み立て、地域の小

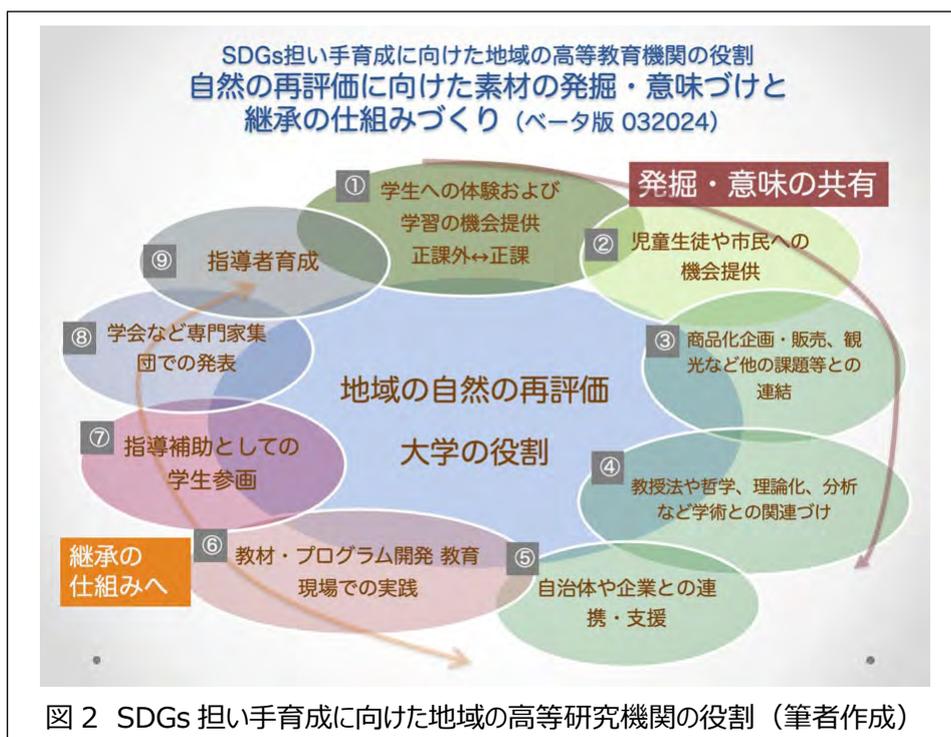


図 2 SDGs 担い手育成に向けた地域の高等研究機関の役割（筆者作成）

中学校や関係機関とともに定着化を図る必要がある分野であろう。本図はあくまでも自然環境を軸に整理したもののだが、この分野に限らず、各教員の専門分野や関わりを当てはめながら、今後の事業展開の構想や予算配分の戦略化を立てることも可能かと考える。

図 2 はベータ版で今後改善を図る計画だが、表 1 は薬学部の大越絵実加先生が平内町と本学との包括的連携協定のスキームのもと、

表 1 本学の取り組みの項目別整理（筆者作成）

地域の自然の再評価 大学の役割		
	薬学ツバキプロジェクト	イグルー制作プロジェクト
①学生への体験および学習の機会提供（正課および正課外）	ゼミなど	ゼミ、イグルーマイスター講座、保健体育指導法など
②児童生徒や市民への機会提供	ツバキ種子採取、油搾り	イグルーフェスタやHarrow Int'l School Appi、イグルーマイスター養成講座
③商品化企画・販売、観光など他の課題等との連結	リップバーム 雪室ツバキ油	酸ヶ湯温泉、十和田ツアー企画、イグルーカフェなど
④教授法や哲学、理論化、分析など学術との関連づけ	ESD（持続可能な開発のための教育）	イグルーマイスター養成講座、イグルーの強度・リスク調査
⑤自治体や企業との連携・支援	平内町、青森県量子科学センター	青森市、酸ヶ湯、八甲田ロープウェイ、雲谷イグルーカフェ
⑥教材・プログラム開発 教育現場での実践	理科教材（小中高）	イグルーマイスター養成講座
⑦指導補助・運営スタッフとしての学生参画	種子採取イベントなど 理科教材Trialイベント	モヤイグルーカフェ、Harrow Int'l School Appi
⑧学会など専門家集団での発表	日本薬学会、日本薬学教育学会、日本環境教育学会など	10th IOERC、日本雪氷学会（予定）
⑨指導者育成	地域住民インストラクター養成（理科教材）	イグルーマイスター養成講座

この 5 年ほど取り組んできた青森大学×SDGs「北東北の特色ある天然素材を用いた ESD 教材の開発」のツバキプロジェクトの一連の試みと、総合経営学部の佐々木豊志先生が 2017 年以降観光文化研究センターの事業で取り組んできたイグルー制作プロジェクトの一連の試みについて、両先生の協力のもと項目別に整理したものである。こうした整理を通して両プロジェクトが一過性でなく、地域の自然素材の発掘・意味づけと継承の仕組みづくりを射程に入れたものであることがわかる。

昨今、学習者と地域社会の変容を並行でめざす Transformative Learning（変容学習）への関心が高まっている。地域資源であるツバキや雪に対する捉え方と関わり方を開拓し、関わる人たちを大学内外で継続的に広く育成することは、こうした教育の潮流に沿っている上、本学の建学の精神や基本理念にも十分通ずるものでなかろうか。今後は、仕掛けづくりのみならず、上記の「地域資源の捉え方と関わり方」の可視化に向けた研究

および発信に、学内外の関係者の助言や支援を受けながら研鑽していきたい。

2. 2023 年度卒業研究・論文 SDGs 研究センター賞

今年度の応募件数は 5 件で以下の通りの結果となった。まず、5 名の皆さんに受賞のお祝いそしてお礼の言葉を述べたい。最優秀賞の姉帶有李さん(ソフトウェア情報学部)の論文「地球温暖化による青森のりんごへの影響評価」は、統計データの分析を軸にしたもので、過去 10 年間の気象データと青森のりんごの発芽日、開花日等との関係のみならず、過去 10 年間の気象データと青森のりんごの糖度、酸度との関係を分析した結果「降水量が増加する、あるいは日照時間が減少するほど青森のりんごの糖度は増加する傾向」を示し、その精緻な研究で最も高い評価を得た。



図 3 左から柏谷先生、小原さん、姉帯さん、大島先生

【最優秀賞】

氏名： 姉帯 有李「地球温暖化による青森のりんごへの影響評価」（指導教員：大島和裕先生）

【優秀賞（2 本）】

氏名：横内 湧希「青森市のまちづくりにおける残された課題 PDCA サイクルを用いたコンパクトシティ構想の検証」（指導教員：佐々木豊志先生）

氏名：小原 史也「市民参加型薪づくり活動への転換を目指して～"七和薪循環プロジェクト 2023"の取り組みから～」（指導教員：柏谷至先生）

【佳作（2本）】

氏名 今 優祥「りんご農業における補助労働力の確保に関する考察 ～学生・生徒を対象とした作業体験会の成果と課題から～」（指導教員：柏谷至先生）

氏名 小林 海斗「自動車産業と環境問題」（指導教員：佐々木豊志先生）

2024 年度については、応募数と文理融合・領域横断的な作品の増加を目指し、これまでの「告知→募集→審査→表彰」のアプローチから、告知の前後に 4 学部を対象に共同勉強会のような機会を設けることを検討している。

4. 2022・2023 年度 比較環境思想研究会 報告

比較環境思想研究センター長 関 智子

1. はじめに

青森大学・比較環境思想研究会は 2022 年度に発足し、初年度は 5 回の研究会を開催した。この活動が前身となり、2023 年度は比較環境思想研究センターとして総合研究所に位置づけられた。2023 年度も 5 回の研究会を行い、これまでに計 10 回のディスカッションを重ねることができた。

2022 年度は本学東京キャンパスを会場に研究会を開催し、オンライン参加もできるハイフレックス形式をとった。2023 年度は、ゲスト講師の方が東京キャンパス外から配信する方法もとりいれ、柔軟に運営するようになった。さらにアメリカからゲスト講師を招聘し、国際オンライン研究会も実施した。当初より国際比較を行うことを意図していた本研究会としての目標に沿った経過といえる。

一方、大学プレスなどで広報することによって、研究者だけでなく全国からオンライン参加をしていただくことに配慮したため、大学関係者はもちろんのこと、行政、ビジネス、学生、一般市民と様々な属性の方々にご参加いただいた。参加者数は、各回 10～30 名程の範囲であった。

いずれの会も円滑に進めることができたことに感謝申し上げたい。ゲスト講師のみなさま、参加者のみなさま、運営にご協力をいただいたみなさまにこの場をお借りして深くお礼申し上げます。

「環境思想」は、端的に表現すると「自然と人間の共生思想」を意味するが、この 10 回の研究会では多面的なテーマから環境思想へのアプローチを試みた。以下に研究会の概要を報告したい。

2. 2022 年度研究会

2022 年度の比較環境思想研究会は第 1 回から第 5 回まで、場所は本学東京キャンパス 205 教室にて開催し、並行して配信を行った。

〔研究会概要〕

◇第 1 回研究会

テーマ「ディープ・エコロジーの北欧神話的背景

——『巫女の予言』か『高き者の言葉』か」

ゲスト講師：尾崎 和彦氏（明治大学名誉教授）

日時：9 月 30 日（金）16 時 30 分～

18 時 30 分

◇第 2 回研究会

テーマ：「自然の歴史と人間の本性

——科学的見方の集約」

ゲスト講師：加藤 尚武氏（京都大学名誉教授）

日時：10 月 21 日（金）

16 時 30 分～18 時 30 分

◇第 3 回研究会

テーマ：「新しい世界史へ」

ゲスト講師：羽田 正氏（東京大学東京カレッジ長）

日時：11 月 25 日（金）

16 時 30 分～18 時 30 分

◇第 4 回研究会

テーマ：「アーネ・ネスとディープ・エコロジー」

ゲスト講師：尾崎 和彦氏（明治大学名誉教授）

日時：12 月 6 日（火）

16 時 30 分～18 時 30 分

◇第 5 回研究会

テーマ：「ウィルダネス——アメリカ・ノースウッズでの
20 年」

ゲスト講師：大竹 英洋氏（写真家）

日時：2023 年 1 月 27 日（金）

16 時 30 分～18 時 30 分

第 1 回および第 4 回研究会では、まず世界的に知られているノルウェーの環境思想家、アーネ・ネス（Arne Naess）が提唱したディープ・エコロジーをテーマに据え、

第1回と第4回の2回にわたって講演とディスカッションを行った。長年にわたり、ディープ・エコロジーをはじめとする北欧の思想・文化について研究を行っている尾崎和彦氏より、ネスの人物と思想を巡る諸事情、背景について講演およびディスカッションを行った。

これら2回の研究会を通じて、ディープ・エコロジーは日本的な感覚からいったん離れてノルウェーという国に寄り添うことから始めることが、理解を深める第一歩ではないかと感じた。一般的には急進的で非現実的に感じられるディープ・エコロジーも、その成り立ちがノルウェーの国民性を深く反映しているものであると知ると、あらためて世界の広さを認識することができた。

第2回研究会は、加藤尚武氏による「自然の歴史と人間の本性」をテーマに行った。加藤氏はヘーゲル研究の第一人者として知られる哲学者である。また環境倫理学を日本において最初に紹介した一人でもあり、これまで幅広い著述活動を行ってこられた。今回のご講演では、地球と人類存続の視点から私たちが熟考すべき科学的事実について概括いただくとともに、現代における哲学と科学の摩擦や乖離の問題についてお話いただいた。

第3回研究会では、歴史学の側面から「地球市民」構想を唱える羽田正氏をお迎えした。ここでは「ヨーロッパ主導による現行の世界史のあり方はこのままで良いのか」という命題を突きつけられる機会となった。より正確な世界の認識は、各々が属する枠組みを超えた視点からとらえ直されるべきであるという。羽田氏からは、世界史のとらえ直しだけでなく、歴史学から環境問題の改善へアプローチする考え方が示された。

第5回研究会は、写真家の大竹英洋氏をお招きした。アメリカの野生動物たちのダイナミックな生（せい）を追ってこられたこれまでの活動とともに、そのご経験から培った大竹氏の自然界に対する考え方についてお話をうかがった。現地を訪れなければわからないこと、また訪れた先で野生と直面した時に生じた問いに、大竹氏が20年をかけて向き合ってきたことが伝わってきた。写真家かつ思

想家としての大竹氏のプレゼンテーションに魅了される研究会となった。

3. 2023年度研究会

次に本年度に実施した研究会について、報告する。2023年度は、生物多様性条約締約国会議の流れを受けて「30 by 30」（2030年までに生物多様性の損失を食い止め、回復させるというゴールに向け、陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする目標のこと）の思想的背景を探求することを比較環境思想研究会における年間テーマに設定し、5回の研究会を行った。



写真1 研究会の様子。会場参加とオンライン参加の方々によるディスカッション

【研究会概要】

◇第1回研究会

テーマ：「30 by 30 を巡る日本および世界動向のこれまでとこれから」

ゲスト講師：奥田 直久氏（前環境省自然環境局長）

日時：7月27日（木）

16時30分～18時30分

◇第2回研究会

テーマ：「30 by 30 を巡る日本および世界動向のこれまでとこれから：国際交渉の実際」

ゲスト講師：中澤 圭一氏（環境省）

日時：9月26日（火）

16時30分～18時30分

◇第3回研究会

テーマ：「人と自然の接点「里山」の再評価」

ゲスト講師：進士 五十八氏

(元東京農業大学学長、前福井県立大学学長)

日時：12月13日(水)

16時30分～18時30分

◇第4回研究会

テーマ：“Environmental Fables for
Tomorrow: The Language of Warning
and the Language of Hope.”

(明日への環境寓話：警鐘と希望の言葉)

ゲスト講師：Scott Slovic 氏

(米・オレゴン研究所上級科学者)

日時：2024年1月30日(火)

16時30分～18時30分

◇第5回研究会

テーマ：「比較環境思想研究の展望」

これまでの研究会の流れについて

ゲスト講師：岡島成行氏(青森山田学園理事長)

自由討議講師：小林 正明氏(元環境事務次官)

速水 亨氏(速水林業代表)

金 二城氏(青森大学教授)

関 智子(青森大学教授)

日時：3月6日(水)

16時30分～18時45分

第1回および第2回研究会は30 by 30を正確に理解するために、環境省としてCOPに携わってこられたご経験から、奥田直久氏と中澤圭一氏から2回にわたりご講演をいただいた。奥田氏からは日本の自然環境行政の歩みと世界動向を併せて解説いただいた。この歴史的な流れの中で2010年に愛知県で開かれたCOP10で日本が提案したSATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップが発足したことは特記事項である。また国立公園等のように公的に保護されている地域ではないものの、「生物多様性の効果的かつ長期的な保全

に貢献している地域」であるOECM(Other Effective Conservation Measures)が保護地域の対象となっていることは、古来、里山を守ってきた日本人にとっても意義深いことがわかった。

中澤氏からは、COP等の現場ではどのような交渉が行われているのかについて、ご講演いただいた。この中では、実際に保全活動を継続していく上で、目標の野心度を上げることによる必要な資金の増加、評価枠組みの増加による作業量の増加、社会経済活動への主流化を行う上でビジネススタイルの違いによる問題などが論点になっていることがわかった。これらの施策は理想的なアイデアのやり取りでは済まず、現実的な落としどころを求めて交渉の闘いが繰り広げられていることがわかる。

第1回・2回研究会の内容から、第3回研究会は、里山とOECMをキーワードとして選び、里山の再評価をテーマに進士五十八氏にご講演をいただいた。進士氏はランドスケープの専門家であり、都市から農山村までを扱う幅広い著述活動を行ってこられた。ここでは里山の自然環境の構造について基礎知識を確認するとともに、進士氏のランドスケープに対する普遍性と柔軟性を兼ね備えた考え方を学んだ。また里山とは決して日本だけのものではなく、世界各国に見られる自然環境であることを認識した。

第4回研究会は、環境文学研究の世界的権威であり、アメリカのオレゴン研究所上級科学者であるScott Slovic氏をお迎えした。環境文学と心理学の側面から、言葉の力によって人々の意識はどのように動かされ啓発されるのか、長年のご研究からご講演をいただいた。文章には書き手の知識、経験とともに、巧みな文章術が備わってなければ伝わらないことをあらためて認識した。同時に、環境文学を通じて環境問題の改善に寄与したいというSlovic氏の深い願いが伝わってくるようであった。この回は、当初の目的の一つである環境思想の国際比較を行うことができた意味でも意義深い研究会となった。

第5回研究会はこれまでの2年間の総括として、環境思想研究の今後について3名のゲスト講師をお迎えし

て自由討議を行った。本研究会顧問の岡島成行氏より本会の目的と今後の方向性についてお話いただいた。その後、元環境事務次官の小林正明氏より「比較環境思想研究の展望」、速水林業代表の速水亨氏より「森林の未来をつくる——消費者と連携した森林」、本学社会学部の金二城氏より「韓国の里山および自然観」について、それぞれ話題提供いただいた。また筆者、関智子より「GX時代に読み直したい熊沢蕃山とアルド・レオポルド」を提供した。

それぞれの話題に触れながら、比較環境思想研究が今日的課題に対しどのような役割を果たすことができるのか検討した。このことについては引き続き議論を重ねていきたい。

2024年度の比較環境思想研究センターは新たな協力者、協力団体の方々との連携を通じ、より活発な活動と発信を行っていく所存です。今後とも皆さまのご協力をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

3. 『寺山修司 ぼくの青森ノート』刊行

総合研究所・客員研究員 久慈 きみ代

この度『寺山修司 ぼくの青森ノート』（論創社 12月6日）を刊行した。寺山修司の青森時代を調査した論文集である。彼は、周知のごとく、俳句、短歌、詩、小説、ラジオドラマ、演劇、映画、写真、評論、エッセイと多彩なジャンルに華々しい足跡を残し 47 歳という若さで旅立った。今年、没後 40 年、生誕 88 年にあたるが、その人気は衰えをみせない。しかし、彼の全容を捉え、その人気のあり様を明らかにすることは難しい。

敗戦時、小学生（9 歳）の寺山は、父を戦病死で亡くし、中・高時代は、母と離れ一人暮らしを余儀なくされた。この孤独を仲間との文芸活動が救った。大学進学で上京後は、文芸活動の幅を広げ、高度成長期の 60 年代から激動の 70 年代を前衛芸術の旗手とし、様々なジャンルを渡り過激に疾走した。

一体、寺山修司とは、何者であったのか。伝記的調査がほぼ終了した今、次の考察に進む必要性を感じる。捉え難い彼の全容を探るために、彼の原点である青森時代（無名時代）の文芸活動の調査を始めた。彼の埋もれたままの作品を掘り起こす調査から、彼の文芸活動の独自性がみえてきた。作品は集団の場の力を得て創作され、同時に作品を発表する媒体（メディア）も用意するというスタイルであった。この寺山の無名時代に確立した独自のスタイルは、生涯変わらず、後期の演劇・映画まで継続される。

筆者の寺山修司の青森時代を考察した資料論文集は、3 冊目であり、総まとめ編と考えている。寺山世代の高齢化に伴い関係資料の散逸を危惧した調査でもあった。前書で、調査不足で紹介できなかった青森時代（野脇中学校から青森高校を卒業するまで）の新資料の紹介と早稲田大学に進学し、ネフローゼを発症、生死を彷徨いながらの常軌を逸した創作活動で成した作品群をできるだけ網羅し考察した。結果、上述した寺山独自の創作スタイルが浮き彫りになった。

もう一点みえてきたことがある。彼の創作がシュウルリアリズム（前衛芸術）思想に基づいているという点である。寺山は、大きな括りで前衛芸術家といわれる。今回の調査でその原点が中学時代の創作手法にあることが窺えた。彼が極度の孤独の中で精神の崩壊を避けるために無意識に使用した写実を避けた作品創作がその始発であり、高校、大学と長じるに従い、高度なシュウルリアリズム理論と出会い、中学時代の手法の正しさを確信する。以後創作の場でシュウルリアリズム理論に基づく手法を生涯放すことなく、多彩な芸術活動を展開し、生きる指標になる美（作品）を求め続けた。詳細は、本書の第二章を参照されたい。

本書にあげた資料の読み解きを通して、寺山の創作の場のスタイルと創作理念の 2 点がみえてきた。捉え難いという寺山修司の理解のヒントを示せたのではないだろうか。おどろおどろしさの奥にある寺山作品の美・本質をみると、人気の衰えない意味が理解できる。

☆単行本：312 ページ 寸法：13.5 x 2.2 x 19.4 cm、ISBN-10:4846023400、ISBN-13: 978-4846023409

▽その他研究活動

1. 以下のシンポジウムにオンライン参加。

寺山修司国際シンポジウム in アメリカ・ウィスコンシン
ン大学マディソン校



書影

■共同主催：科学研究費助成（代表：葉名尻竜一）
基盤研究（C）20K00301「寺山修司記念館所蔵資料の基礎研究にもとづく地方文学館利活用の新開発」アメリカ・ウィスコンシン大学マディソン校東アジア研究センター

■後援 三沢市寺山修司記念館・さっぽろ寺山修司資料館

■2023年11月3日（金）、4日（土）

※現地時間

会場：アメリカ ウィスコンシン大学マディソン校

開催方法：対面 + オンライン（Zoom）

言語：日本語

■1日目

- ・上映会+解説：石原康臣（美術家）「映像往復書簡-寺山修司と谷川俊太郎-から-萩原朔美と吉増剛造-へ」
- ・特別対談：山形健次郎（さっぽろ寺山修司資料館代表）× スティーヴン・リジリー（ウィスコンシン大学マディソン校）

■2日目

- ・研究発表 10：00～12：00 司会：葉名尻竜一（立正大学）、スティーヴン・リジリー／小菅麻起子（寺山修司研究家）「ビジネスダイアリーから寺山修司著作年譜へ」／ジョナサン・E・アベル「死のリミックス：寺山×谷川『ビデオレター』における身体の感情、沈黙の詩学」／久保陽子（富山高等専門学校）「寺山修司の少女向け作品と日本の少女文化」／サーリネン・カイサ（作家・独立系研究者）「ずたずた挽きし花カナ：寺山修司の短歌を連作として翻訳する」
- ・基調報告 13：00～13：40 スティーヴン・リジリー「寺山修司と数学」
- ・シンポジウム 13:40～15:30 司会葉名尻竜一／登壇者：久慈きみ代（青森大学名誉教授）、ミヤマ・サス、堀江秀史（静岡大学）、スティーヴン・リジリー▽題目：葉名尻「[質問]する短歌」／堀江

「寺山修司と昭和、あるいはアメリカ」／久慈「あなたは、どこから来たの？ 新出毛皮のマリー天井棧敷公演台本の考察」／サス「寺山修司とメディア感覚」

2. YouTube 公開

- (1) 寺山修司と山形健次郎：『牧羊神』同人山形健次郎インタビュー1 生い立ちと高校生の頃（インタビュー日 2021年9月18日 場所 北海道札幌市 さっぽろ寺山修司資料館 聞き手 葉名尻竜一、堀江秀史 山形健次郎氏）
※基盤研究(C) 20K00301 共同研究「寺山修司記念館所蔵資料の基礎研究にもとづく地方文学館利活用の新開発」

制作・著作：共同研究代表・葉名尻竜一（立正大学）／研究協力者：久慈きみ代（青森大学名誉教授）、小菅麻起子（寺山修司研究者）、研究分担者：堀江秀史（静岡大学）／映像編集：堀江秀史

（公開日：2022年3月31日）

- (2) 鳴海廣氏インタビュー 歌舞伎座と寺山修司

（インタビュー日：2022年9月16日、場所：青森市鳴海廣氏自宅、聞き手：久慈きみ代、小菅麻起子、葉名尻竜一、堀江秀史）

※基盤研究(C) 20K00301 共同研究「寺山修司記念館所蔵資料の基礎研究にもとづく地方文学館利活用の新開発」

制作・著作：共同研究代表・葉名尻竜一（立正大学）／研究協力者：久慈きみ代（青森大学名誉教授）＝家系図その他資料作成／研究協力者：小菅麻起子（寺山修司研究者）／研究分担者：堀江秀史（静岡大学）＝字幕・映像編集

（公開日：2023年3月31日）

5. 学生は「仏陀の戦争」の結末をどう考えたか

社会学部 飛内 文代

1. はじめに

文学（基礎スタンダード科目）は、前・後期とも同じ内容で開講している。内容は、青森県のさまざまな作家について、作品の本文を読みながらその生涯をたどり、青森の文学について理解を深めることである。

取り上げる作家の中に秋田雨雀（1883～1962）がいる。黒石に生まれた雨雀は、詩人としてスタートしたが、後に演劇活動で大きな業績をあげ、また社会主義運動やエスペラント活動などで国際的にも活躍した。1927年には、ロシア革命10周年記念祭に国賓として招かれ翌年5月までソビエト連邦（当時）に滞在している。

雨雀には児童文学作品も多く、1921年に刊行された『太陽と花園』は代表作のひとつである。

2. 経緯

雨雀の作品として、それまで「太陽と花園」を紹介していたが、2022年からは「仏陀の戦争」に差し替えた。きっかけは、ロシアによるウクライナ侵攻である。

「仏陀の戦争」は、甲と乙の二国が、領有権の曖昧な国境の山を巡って争うという話である。「国民を愛し我が国土を愛するが故」に戦争を推し進める王と、王の言うがまま忠誠を尽くす家臣たち。戦いは長引き、両国は疲弊し、国民は辛酸をなめる。僧が諫めても、両国の王は「国民の幸せのため」と言って戦争を続け、豊かな森林に被われていた山は戦火によって焼け山となる……。

2月24日の侵攻開始から被害の拡大が報じられ、間もなく決着がつくだろうその時までにウクライナはどれほど踏みこられるのかと暗澹たる思いだった。が、4月になっても決着はつかなかった。

「仏陀の戦争」は、100年前に作られた作品だが、あまりにも現在の状況を彷彿とさせる。

学生たちはこのような争いをどう捉えるのだろうか？

そこで、講義で「仏陀の戦争」の本文を配付し、次のような課題を出すことにした。

課題1：秋田雨雀「仏陀の戦争」は、最後の1段落（約250字）を削除してある。この作品を読んで、その後の結末を考え、400字以内で書きなさい。

課題2：このような結末にした理由を説明しなさい。

本文は、『名著復刻 日本児童文学館 第一集 童話太陽と花園』（1976年9月 ほるぷ出版）を用い、表記は漢字・仮名遣いともに現在のものに直した。なお、出題に当たっては、作品の解説や出題の意図等の説明は一切せず、学生の自由な発想に任せた。

最初は2022年の5月に実施。一度きりの筈だったが、2回目も10月、そして3回目は2023年5月、4回目も10月と続くこととなった。

課題を提出した学生数は、2022年が前期89人・後期86人、2023年は前期101人・後期59人である。

3. 学生の作品のまとめ

学生が作成した文章は、長さも内容もさまざまであり、SF風・ロマンス・ミステリー仕立てなどオリジナルのストーリー展開があるものも少なくなかった。それらの内容を次の2点に絞ってまとめた。

A 二国間の争いの結末

B ウクライナや現在の戦争の影響を上げているか

(1) 二国間の争いの結末

図1は、課題1の記述を7つに分類したものである。

「1 争いが続く」とした学生は一定数いたが、「2 どちらか一方が勝つ」とした学生は少なかった。

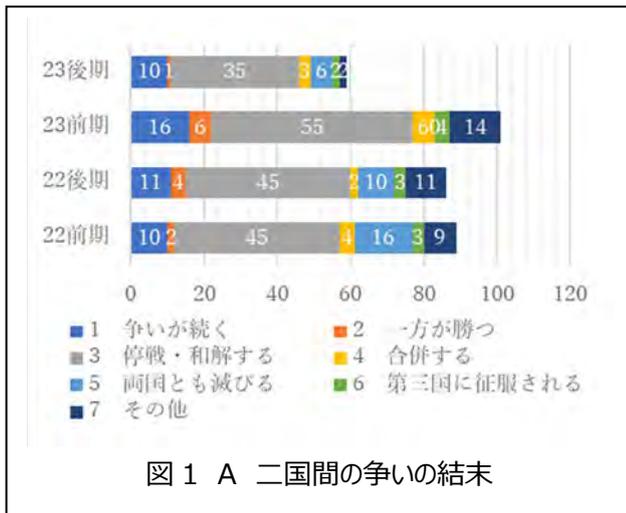


図 1 A 二国間の争いの結末

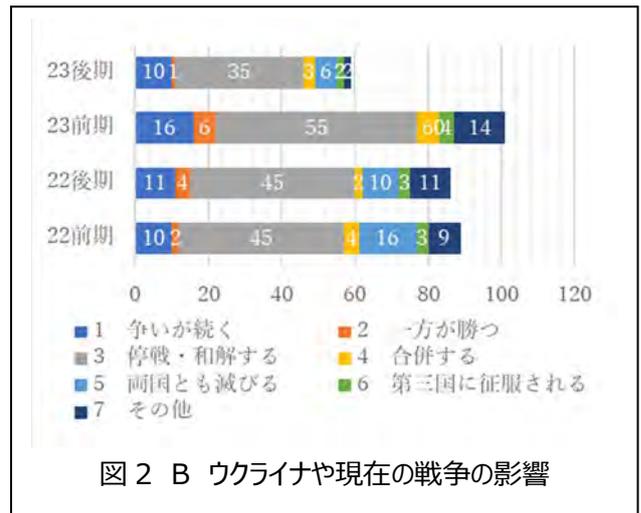


図 2 B ウクライナや現在の戦争の影響

「3 停戦・和解する」とした学生が最も多かった。「4 両国が合併する」を合わせると、2022 年後期で最低でも 55%、2023 年後期は最高の 64%となり、ほぼ 6 割が停戦や和解に至るとした。「二国の王が国民の苦しみに気付き話し合う」というものが多いが、中には「国民が王を斃しその後」「王が死んで代替わりしてから」和解するといった結末も少なくなかった。

一方、「5 両国とも滅びる」と「6 第三国に征服される」を合わせると、最低は 2023 年前期の 4%で、最高が 2022 年の 22%であった。第三国を登場させた学生は、諺「漁夫の利」をあげて説明していた。

学生たちの記述を読み進めていくと、多くは、一方的な勝利は無く、争いは簡単には終わらないが、争い続けると両国とも滅びるだろうから、話し合い、停戦・和解してほしい、そうでなければ国民を苦しめる王は斃される、と考えているようである。

(2) ウクライナや現在の戦争の影響

前述の 3・4 の結末にした理由として、多くは「ハッピーエンドにしたかった」ことをあげている。一方、他の結末にした場合の理由はさまざまである。図 2 は、課題 2 の記述から B について拾ったものである。

一見して明らかなように、現在世界各地で続いている戦争をあげる学生は毎回変わらずいるが、ウクライナ侵攻

をあげる学生は時間の経過とともに減少し、2023 年後期では 0 となった。

2022 年前期、学生たちの次のように書いた。

「今はロシアとウクライナが戦争をしていて、物語のようにめでたしめでたしと終わるわけが無いけれども、どうか早くなるべく平和な方法で戦争を終えて欲しいと祈るばかりです」(総合経営学部 1 年)。

「現在、ロシアのウクライナ侵攻が世界を騒がせている。世界の平和が崩れつつあるように感じる。最後の言葉は、二度と第二次世界大戦のような悲劇を繰り返さないようにと、世界平和を願う言葉で締めくくった」(社会学部 3 年)

「この話を読んだ時、今のロシアとウクライナの問題を思い出しました。(中略) 私は、目の前のことだけでなく、自国の国民はどう思っているのか? 周りはどうな気持ちなのかを正直に受け止めて欲しい。そして、願わくば、もう難しいかもしれないが、両国が手を取り合って平和に暮らして欲しいという思いを込めてこのような結末にしました」(社会学部 1 年)

そして 2023 年前期の学生はこう指摘する。

「人類の歴史が始まってから現在まで、戦争や内戦、紛争などの争いはなくなっていない。実際にウクライナ侵攻・シリア内戦・アフガニスタン紛争などの争いは続いています。」(社会学部 1 年)

報道の多寡の影響はあるにしても、学生たちが国際情勢に一定の関心を持っていることが窺える。

4. 秋田雨雀の願いを

雨雀は「仏陀の戦争」をこう結んだ。

「昔あんなに戦った甲の国と乙の国は、今は兄弟のように仲良くして交際していました。もう誰に聞いて見ても、昔の戦争の話を知っている者はありませんでした……」

3 の(1)でまとめたように、この思いは、100年後の大学の学生たちにも伝わっていると思う。声高に主張することはなくとも、これが、文学作品の力であろう。

建国したばかりの若いソビエト連邦に期待し、ロシアの人々に心を寄せ、ロシア文学を日本に紹介した雨雀。第二次世界大戦中には思想犯として弾圧され、収監されたこともある。

雨雀が今のロシアを巡る状況を見たらどれほど悲しむだろう。いや、怒るかも知れない。それでも雨雀は諦めないだろう。76歳にしてたったひとりの孫娘に先立たれ、それをきっかけに、若い人命を守るための「不死鳥運動」を始めた雨雀だから。

ただ、2024年にも同じ課題を課すことになりそうであることが、残念でならない。

6. 映画「プリズン・サークル」自主上映会

社会学部・青森大学 BBS サークル顧問 熊谷 芳子

1. BBS サークルについて

BBSとは、Big Brothers and Sisters の頭文字を取った略称であり、非行などの様々な問題を抱える少年に対して、兄・姉のような立場で接しながら、少年が健全に育成することを支援する目的で、全国的に活動する青少年のボランティア団体です。全国で約 4,000 人が会員として活動しており、各地域・大学の学域に設置された BBS 会が存在します。また、法務省の協力団体として保護観察所のほか、保護司会や更生保護女性会等のボランティア団体及び地域公共団体等とも連携しながら、活動を行っています⁽¹⁾。

青森県内では、青森大学 BBS サークルのほかに、弘前大学、青森県立保健大学、青森中央学院大学などが学域 BBS 会として BBS 活動を行っており、連携して活動を行っています。

BBS 活動は主に①ともだち活動②健全・育成活動③広報・啓発活動④自己研鑽活動の 4 つに分けられます。①ともだち活動とは、『非行少年や、社会に適應できないなど何らかの悩みを抱えた少年と「ともだち」になることを通して、彼らの自立を支援する持続的な活動』と定義され⁽²⁾、青森県内でも、各学域サークルを中心に、さまざまなともだち活動を行っています。②健全・育成活動は、子ども・若者が犯罪や非行などの問題行動に陥ることなく、また、生きづらさを抱えながらも自分らしく前向きに生きていけるよう、自己も他者も共に大切にできる豊かな心を育むことを目的に、特定の個人ではなく、子ども・若者に広く働きかけていく活動です。③広報・啓発活動とは、地域に広く働きかけ、非行からの立ち直りを温かく見守り、子ども・若者一人ひとりが安全で安心して生きていける地域社会づくりを行う活動です。④自己研鑽活動とは、BBS 会員それぞれが、子ども・若者から信頼される存在となるよう、BBS の実践活動に取り組む上で必要となる心構え、知識や技術の習得と向上に向けて努める活動です。

今回の映画「プリズン・サークル」自主上映会は、④自己研鑽活動にあたる内容であったと考えます。

2. 映画「プリズン・サークル」上映会について

青森大学 BBS サークルは、コロナ禍により活動が制限された状態が続いておりましたが、今回、活動を再開する足掛かりとして、法テラス青森様にご協力頂き、令和 6 年 2 月 1 日に、映画「プリズン・サークル」自主上映会を開催することとなりました。

また、上映会を開催するにあたっては、保護観察所を始めて、たくさんの関係機関にご後援を頂きました。ご後援頂いた各関係機関の方々には、この場を借りて、御礼申し上げます。

映画「プリズン・サークル」(図 1、坂上香監督・制作・編集、2019 年/日本/136 分)は、日本で初めて刑務所の中を撮影したドキュメンタリー映画です。この映画の舞台となったのは、島根県にある、官民が協働して運営する PFI (Private Finance Initiative) 刑務所である「島根あさひ社会復帰促進センター」です。PFI 刑務所とは聞きなれない言葉だと思いますが、2008 年に全国で 4 か所作られました。そのうちの一つである島根あさひ社会復帰促進センターでは国内の刑務所で唯一、受刑者同士の対話をベースにした『TC (Therapeutic Community)』というプログラムを取り入れています。

回復共同体と訳される TC では、受刑者同士が、対話を通して人間的成長や、犯罪の原因を探り問題への対処法を身につけることを目指します。映画では 4 名の受刑者に焦点を当て、プログラムの参加を通して、彼らが変化していく姿を追っています。

日本の刑務所の最も顕著な特徴は「沈黙」だという指摘があります。映画『プリズン・サークル』の舞台は刑務所ですが、語り合うこと(聴くこと/語ること)の可能性、そ



図 1 「プリズン・サークル」ポスター
©2019 Kaori Sakagami

して沈黙を破ることの意味やその方法を考えるための映画だと坂上監督は語っています⁽³⁾。

映画の中で 4 名の受刑者が語る彼らの世界は、暴力の日常と奪われ続けた日々です⁽⁴⁾。そして受刑者が過去に受けてきた壮絶な暴力、貧困、いじめを言葉にすることで、最終的には自分自身の「加害」について受け止めていく変容を見せていきます。そして、映画で描かれている「自分の辛さを言葉にして受け止めてもらえる場所」は、現代の日本社会でも必要とされていると監督は語っています。

映画については、公式ホームページや書籍などで、その内容について知ることができますので、ご興味のある方はぜひご覧ください。

上映会を開催するにあたって、たくさんの方々のご助言・ご協力を得ながら準備を進めました。上映会の開催にあたっては、ご後援頂いた各機関・団体を中心に、広報を行いました。

また、社会福祉士の資格を取得するための指定科目である「刑事司法と福祉」という講義では、主に福祉と司法の連携の必要性について学んでいます。その講義を受講している学生に、映画内容について説明し、希望した学生にも上映会に参加してもらいました。

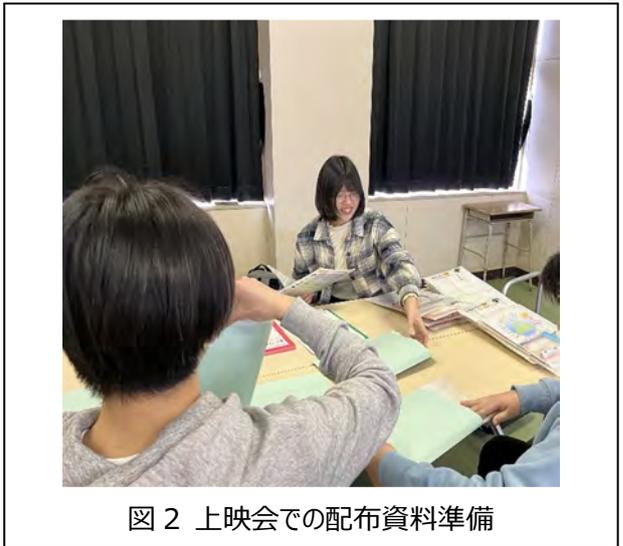


図 2 上映会での配布資料準備



図 3 映画上映会の当日の様子

上映会での配布資料準備（図 2）や、当日の司会・進行・受付業務を BBS サークル会員で行いました。

当日は、100 名の方にご来場頂き、映画上映も滞りなく開催することができました（図 3）。

映画上映会の冒頭では、法テラス青森様から、法テラス活動内容等についてお話を頂きました。

3. ご来場者アンケートの結果について

映画をご覧頂いた皆様からは、お帰りになる際に、直接、口頭でもたくさんの心のこもったご感想を頂きましたが、上映会終了後、FAX 及び Microsoft Forms を利用して、法テラスに対してと映画「プリズン・サークル」の感想を無記名で募ったところ、後日、約 35 名の方からご回答頂きました。

について、考えさせられた方も多かったようです。

(3)上映会について

最後に、本上映会を開催したことに対する感謝の言葉も多く寄せられました。

この上映会は法テラス青森様のご協力がなければ実現は不可能でした。改めまして心より感謝申し上げます。

4. 今後の活動について

以上のように、本上映会ではたくさんの貴重な経験をすることができましたが、冒頭でも記載した通り、今回の映画上映会は、青森大学 BBS サークル活動の再開への足掛かりという目的がありました。

今回、この上映会をとおしてたくさんの方々との出会いがありました。今後は新入生に対する勧誘や、青森県内の他大学等の BBS 会との交流の活発化を目指します。

また、BBS 活動の中核ともいえる「ともだち活動」は、依頼されて初めてできる活動であるため、依頼元との信頼関係が必要です(2)。青森大学 BBS サークルが地域から団体として信頼してもらえるように、会員として何ができるか会員一人一人が考え、また、必要な技術や知識を身につけながら、活動していきたいと考えています。

注

- (1) 更生保護ボランティア団体「BBS 連盟」
(<https://www.bbs-japan.org> R6.3.13 閲覧)
- (2) 法務省保護局「ともだち活動をするみなさんへ」
- (3) 坂上香「プリズン・サークル」岩波書店, 2022
- (4) 打越正行、宮内 洋、松宮 朝、新藤 慶「〈生活一文脈〉から考える映画『プリズン・サークル』における痕跡」、『人間発達学研究』(13)、2022、3

7. ニュースレター「はっしん！ 新青森」創刊 50 号、連携・交流拡大の起点に

社会連携センター・副センター長 榎引 素夫

1. はじめに

青森大学・榎引研究室が 2019 年 6 月に創刊した新青森（駅）ニュースレター「はっしん！ 新青森」が、12 月 20 日号で通算第 50 号に到達した（図 1）。3 月 20 日には第 53 号を刊行した。ニュースレターが縁をつなぐ形で、JR 東日本と本学の連携が拡大しているほか、青森県立青森西



図 1 第 50 号の表面

高等学校（岡一仁校長）と三内地区の住民団体「三内を美しく元気にする会」、北海道長万部高等学校（濱田哲也校長）、青森市立新城中学校（中村薫校長）との交流が生まれるなど、多大な成果を上げている。

2. 高大連携事業として展開

同ニュースレターは青森西高校と本学の高大連携協定に基づく「高大連携」事業の一環として毎月、A3 版両面カラーで制作・発行、独自の Facebook ページでも内容を紹介している。JR 東日本の協力を得て新青森駅や青森駅、そして駅に近い三内丸山遺跡、青森県立美術館の話題を毎回取り上げている。

新型コロナウイルス感染症により何度か休刊を余儀なくされたが、2019 年度から 3 年間は青森学術文化振興財団の助成事業として、2022 年度以降は青森大学社会連携センターの独自事業として発行を継続している。

新青森駅と東北・北海道新幹線、そして駅周辺地域の話題を紹介するとともに、制作・配付を通じて情報や人が行

き交うことで、「新幹線と駅の利用者」、「地域と駅」、そして「地域同士と人」をつなぐ「コミュニケーション・ツール」の役割を果たすことを目指してきた。新幹線駅を起点とし、名を冠したメディアは、恐らく全国に例がない。

一連の活動の様子は、日本地理学会の学術大会でも 3 度にわたり報告、一定の評価を得てきた。以下、直近の話題をいくつか紹介する。

3. 青森西高校と長万部高校の交流

青森西高校の「青西おもてなし隊」生徒 17 人が 9 月 15 日、同校で、北海道長万部高校（濱田哲也校長）の 2 年生 13 人と初の交流会を開き、互いの高校の活動に理解を深めた（図 2）。

北海道新幹線の札幌延伸に伴い、長万部町には北海道新幹線・長万部駅が開設される。長万部高校生は町民の先頭に立って北海道新幹線・長万部駅を中心としたまちづくり検討に携わってきた。町は 2021 年から毎年、青森市など東北新幹線沿線で研修会を企画しており、筆者が新青森駅や青森駅の案内をしてきた。筆者が青森西高校との高大連携事業にも携わっている縁で、長万部高校と青森西高校との縁につながり、これまでも、新青森駅近くの散策など



図 2 青森西高校と長万部高校の交流会

を通じて交流してきた。

本年度はコロナ禍が過ぎ、初の本格的な交流会にこぎつけた。長万部高校生たちは筆者の案内で青森駅や新青森駅を視察した後、同校に到着して歓迎を受けた。両校の生徒が学校行事や特色、日頃の活動内容を紹介した後、4～6人のグループに分かれて地元の特徴や名物、方言などをめぐって歓談した。また、北海道新幹線・長万部駅開業に向けてのアピール方法について意見交換し、「長万部町のゆるキャラ・まんべくんをあしらったポスターを作ったり、独自の駅の発車メロディーを考えてはどうか」といった意見が出た。

4. JR 東日本が「キャリア特別実習」で特別授業

青森大学の授業「キャリア特別実習」で11月15日、JR東日本・青森営業統括センターによる特別講話が行われた(図3)。キャリア特別実習は総合経営、社会、ソフトウェア情報の3学部の1～4年生を対象とし、青森キャンパスとむつキャンパスを結び開講している。就職活動の準備に加えて、多様な人生キャリアのデザインを自分で描くために、さまざまな実践や体験を試みるとともに、学外の方々の講話を聞く機会を設けている。

今回の特別授業は、青森大学が新青森駅を拠点に、青森西高校との高大連携によるニュースレター「はっしん！新青森」を刊行していることなどが縁になって実現した。青森営



図3 JR 東日本青森支店による特別授業

業統括センターの虹川秀栄(しゅうえい)副長が、自身がJR東日本に就職した経緯、これまで経験してきた仕事、同社の業務内容を紹介するとともに、地域とタッグを組んだ「デスティネーションキャンペーン」、青森駅前の商業施設「A-FACTORY」におけるリンゴを加工したシードル醸造、「JRあおもり駅まつり in 八甲田丸」、「鉄道の日まつり in 新青森」といった事業とイベントを解説した。また、15年に及ぶ勤務を通じて「お客さまを増やすために、地域そのものを元気にする取り組みに携わろうと、今の職種を希望した」など、自らの「働きがい」についても明かした。

続いて、中目(なかのめ)慧氏が予約システム「えきねっと」や、スマートフォンで新幹線に乗れる「タッチでGo!新幹線」、JRE POINTの仕組みなどについて説明した。

4. 青森西高校と新城中が初の交流会

青森西高校「青西おもてなし隊」と青森市立新城中学校「おもてなしボランティア」の初の交流会「おもてなしフォーラム」が11月27日、新城中学校で開かれた。ボランティア活動に取り組む両校の生徒約50人に加えて、新城中OBの青森大学生、住民団体「三内を美しく元気にする会」の会員らが参加し、新青森駅をはじめ学区内の魅力再発見をめぐって懇談した(図4)。

青森西高校と新城中はともに、新青森駅を拠点の一つと



図4 新城中学校と青森西高校の交流会

して、おもてなしボランティアに取り組んでいる。また、筆者が制作するニュースレター「はっしん！ 新青森」で両校や「三内を美しく元気にする会」の話題を取りあげてきた。青森西高校と櫛引研究室は2019年から「おもてなしフォーラム」を開催してきたが、今年は新城中が加わり、さらに新城中学校区学校運営協議会委員と新城小・新城中央小の教員も参加して、小・中・高・大が連携しての催しとなった。

筆者が司会を務め、初めに新城ボランティア企画委員長の丸山心海（ここみ）さん（3年）が、ミニ金魚ねぶたを横浜市のJR小机駅、県内の医療関係者や宿泊施設、青森県の総合販売戦略課、東京・大阪・福岡の青森県アンテナショップ、地元の消防署などに寄贈してきた取り組みを報告した。続いて、青西おもてなし隊の雪田菜月さん（1年）が、2010年の東北新幹線・新青森駅開業に合わせて隊が発足した経緯、コロナ禍を経て今年、大型クルーズ船の歓迎が復活したこと、青森ねぶた祭で初めて石江江渡下町会の「地域ねぶた」運行を支援したこと、北海道新幹線の札幌延伸を視野に北海道長万部高校と交流が始まったことなどを紹介した。

その後、生徒たちは4～5人のグループに分かれ、新城中の学区にあるお気に入りの景色・場所をめぐって意見交換し、「真っ白な雪原をJR奥羽線の列車が走ってくる光景が好き」「中学校の4階から見える夏の風景がきれいだと思う」といった声が新城中の生徒から上がっていた。

また、新青森駅東口とエントランスホールの活用法についても懇談し、「大きな鶴の折り鶴を飾れないか」「地元名産品を置きたい」「出店を開きたい」といったアイデアが出た。さらに、東口の広場に「雪像を作ってはどうか」という提案があった。新城中の丸山心海さんは「2校合同で何か新しい活動ができそうだとワクワクしながら意見を出し合えました」、おもてなしボランティア担当の山形亜紀子教諭は「人生の先輩でもある青西おもてなし隊の皆さんや卒業生の青森大学生とお話できて、生徒たちにはとても良い刺激になった」と手応えを語っていた。

青西おもてなし隊1年の佐藤虹果（このか）さんは「緊張していたが、あたたかく迎えてくれたことにより少しリラックスできました。活動自体も思っていた以上のことを行っていたので、うらやましい気持ちもありました。このような活動ができてよかった」、同じく工藤桜子（さくらこ）さんは「中学生の方が積極的に意見を出してくれたおかげで、たくさんの良いアイデアを聞くことができた。また、青森について知らなかったことをたくさん知る良い機会になった」、同じく山本菜々さんは「世代の違う人と話し合う機会はなかなかないので貴重な体験ができました」と振り返った。新城中OBで青森大学社会学部1年の加藤未宙（みひろ）さんは「大学生として何か地域のためにできることはないかと考えるいい機会になった」と話していた。

8. 中村公英氏を講師に特別講演会「昭和青森を生き抜いた男たち－淡谷悠蔵と竹内俊吉の時代」

青森大学附属総合研究所は 2024 年 2 月 29 日（木）、青森市のあおもりスタートアップセンターで、本年度の特別講演会を開催した。前年度に続き、青森商工



会議所元副会頭で百貨店「中三」元社長の中村公英氏が講師を務め、「青森歴史こぼればなし第 2 話・昭和青森を生き抜いた男たち－淡谷悠蔵と竹内俊吉の時代－」と題して、約 40 人の聴衆を前に講演した。

青森市出身の淡谷悠蔵は社会党の国会議員を務め、ブルースの女王・淡谷のり子の叔父としても知られる。また、竹内俊吉は東奥日報記者・役員を経て衆院議員、青森放送社長、青森県知事などを務めた。

中村氏は多くの文献を引きながら、ともに文学者でもあり、政治的な立場は異なるものの深い交友で結ばれていた 2 人のエピソードを語った。

◇総研日誌（2024年1月1日～3月31日）

▽1月17日（水）

・第9回運営会議

▽2月1日（木）

・映画「プリズン・サークル」自主上映会（青森大学
BBSサークル、青森大学）

▽2月7日（水）

・第10回運営会議

▽2月29日（木）

・特別講演会「青森歴史こぼればなし第2話・昭和
青森を生き抜いた男たち－淡谷悠蔵と竹内俊吉の
時代－」（講師・中村公英氏、あおもりスタートアッ
プセンター）

▽3月6日（水）

・第11回運営会議

◇編集後記

激動の2023年度も末になりました。新型コロナウイルス感染症が「5類」に移行し、日常が戻ってくる一方、正月早々の能登半島地震、さらには記録的な暖冬・少雪など、天変地異も相次いでいます。イスラエルのガザ侵攻やロシアによるウクライナ侵攻も出口が見えません。

そんな中でも、本学の教育・研究・社会貢献活動が進んでいる様子が、この「総研だより」第5巻第4号に示

されている、と感じます。

おかげさまで、号数を重ねるごとに、多くの方にご投稿いただけるようになりました。「学生中心の大学」、「地域とともに生きる大学」、そして「学生が輝く大学」という本学の理念にふさわしい刊行物となるよう、今後も精進を重ねて参ります。新年度もよろしく願い申し上げます。

（素）